

当に心のやさしい少女だったという。同じ年頃の子供が近所にいないせいとか、二人は急速に親しくなった。祖母の家では、二人が、必要以上に仲よくなるのを止めさせようと必死になったが無駄だった。二人は、よく、女中奉公の少女の妹や弟の話をして泣いていた。泣き始めるのはいつも地主の娘の方だった。私だけは、あなたと一緒に、いつも一緒に。何もかもに恵まれている少女は、そう呟いて泣いていたそうだ。ある日、突然、二人は川に身を投げた。女中奉公の少女は字が書けなかったので、遺書は地主の娘のものだけだった。私だけが、この人のことを解ってあげられるのです。そうひと言書かれただけの遺書だった。村中が大騒ぎになった。誰もが、美しくてやさしかった地主の